

大阪医科大学2005年卒業の小村和正と申します。自分は、本学卒業後、大阪府済生会中津病院にて2年間の臨床研修修了を経て、2007年より大阪医科大学泌尿器科学教室レジデントとして、本学で研鑽を積ませていただいております。

医師になった時、自分が海外に留学するとは、周りの先生方より僕自身が一番思っていなかったと思います。本教室の東教授、稲元准教授に、臨床事象を論文として発信する重要性、基礎研究に落とし込んで考えるマインドについて薫陶を受け、卒業後コツコツと自分なりに論文を書く努力をしていました。何とか自力で海外留学先を交渉して見つけれられたらカッコいいな、と思い、アメリカ、欧州含めて20施設以上に手紙を書きましたが、現実には甘くなく、なかなか受け入れ先は見つかりませんでした。そんな時、状況を静観されていた東教授より、夜中3時に「ハーバードに留学するように手配しました」と一文のメールが送られてきて、さらに立て続けにimmigration officeよりビザ申請のメールが流れ込んでいました。その時期には、すでにハーバード大の移植の研究室に本教室同期の上原先生がいられていたの、spotはなかったのですが、東教授が粘り強くがん研究分野で新規スポットを交渉していただいていたのを知り、翌日飛んで謝辞を伝えに走ったのを覚えております。

2014年4月よりアメリカボストンにあるダナファーバー癌研究所DFCIに留学しました。この地域はロングウッドメディカル地域といわれ、DFCIのほか、ブリガムウイメンズクリニック、ボストンチルドレンズホスピタル、ハーバードメディカルスクールHMSが隣接しており、近隣にもマサチューセッツ工科大学MIT、マサチューセッツ総合病院MGHがある世界有数の先進医療研究地域でした。自分は、当時DFCIの固形腫瘍研究班の統括リーダーであり、前立腺がん研究の第一人者であるDr. Philip Kantoffのラボで研究をできることになりました。

普段、わからないことがあれば直接聞こう、となるのが日本語ですが、海外ではそれができません。当初は、英語でのコミュニケーションに本当に苦労しました。研究でもある程度のテーマは与えられますが、そこから先は完全に「What's the plan?」のオンパレードで、自分で研究計画を組み立てて、必要なら色々なチームと協力するようにしないと、何も進まない(今思うとこれが一番重要でしたが)感じていました。コツコツとチームで研究成果を重ねていき、Y染色体上のエピジェネティックファクターの重要性についての研究で、アメリカで研究費申請をPIのPhilとともに注力しました。結果2015年末にU.S. Department of Defense (DOD) GRANTSに本研究が採択されDevelopment Awardを受賞され



ボストンの時のボクシングジムの友人たち



研究室の同僚たち

ることになりました。ボストンの冬は寒く、-30℃になる朝方の道を登山服を着て通勤し続けた甲斐があったと、同僚と祝いあったのを覚えております。

そのすぐ後に、ボスのPhilが、ニューヨークのメモリアルスローンケタリング癌センターのChairman in the Department of Medicineに就任することになり、一緒に来るか?と話をいただきました。ボストンとニューヨーク両方で研究できるなんて、すごくかっこいい!と思い、東教授に相談させていただくと「チャンスのをがさず、ニューヨークでも頑張ってきてなさい」と激励をいただき、2016年5月よりニューヨークのMSKCCに研究の場を移すこととなりました。この頃には、笑顔でdiscussionすることが少しずつできるようになっており、かなりスムーズに研究にはいることができました。ボストンに引き続き、ニューヨークでも、たくさんのお会いがあり充実した日々を過ごすことができました。研究だけではなく、マンハッタン内では、世界中から色々な業種、人種があふれており、いろいろな人の価値観を聞く機会は、自分の人生の大きな糧になったと思います。2017年4月より、当医局の吉川先生が後任としてNYに来られ、自分は2017年6月より本学へ復学させていただきました。現在、ボストンのメディカルエリアに2人(来年より3人予定)、ニューヨークに1人が留学しておられ、ことあるごとに東海岸で集まって楽しそうに過ごしているのを日本より見ていて、本当に嬉しく、少し羨ましいです。

留学に行かせていただいて学んだことを挙げるとすれば何よりも「Stay positive」です。すべての環



NYのときのマンション前

境が一変する留学生活では、もちろん楽しいことだけではなく、大変なことも多かったですが(そちらが大半!?)、どのような状況でも出会う人に感謝して、笑顔で明るくポジティブに一生懸命、これは世界共通で評価されると確信しました。今後の医師、研究者としての自分の人生において最も大きな財産になったと思っています。

今回の留学にあたり、大学法人より田中忠彌国際交流基金のご支援を頂きました。様々な御配慮を頂きました本学、植木實理事長、大槻勝紀学長、東教授、医局の先生方、同門会の先生方(仁望会)、関係各位の皆様にご心より感謝いたします。このような若輩ではございますが、本学、そして今後の医学の発展に、少しでも貢献できるように尽力していく所存でございますので、今後とも、御指導御鞭撻いただけますようお願いいたします。ありがとうございます。



当科泌尿器科学教室の先生方と、ボストンでのミーティング後の会食
左より、小村、伊夫貴先生、東先生、Dr. Sweeney、稲元先生、吉川先生、Dr. Kantoff